

園庭環境における保育活動の実践

はじめに

原発災害で戸外遊びを制限された福島の子ども達の自然との関わりは、今以て十分に回復しているとは言い難い。幼児が戸外の自然環境を自分の遊びのなかに取り込んで、豊かな遊びを展開するためには、安全な自然環境を用意する必要がある。幸い本園は広い面積の園庭を保有しており、幅広い体験を保障する戸外環境を構成できる。そこで砂との関わり、作物の生成や水辺の生き物との関わりなど、震災で失われた環境をできるだけ取り戻そうと努力してきた。安全な園庭において、幼児の発達に不可欠な自然との関わりを充実させる保育は、今まさに福島に必要とされる保育課題でもあると考える。その課題へのアプローチとして、附属幼稚園の特色の一つでもある、広い園庭や自然豊かな環境を活用した実践が、保育実践や保育教材の見直しの一助になれば幸いである。

1. 砂との関り

本園は、3、4、5歳児のそれぞれの発達にあわせて、その年齢なりの活動が十分にできるよう3つの砂場を持っている。しかし、除染後に桙等が損傷し、コンクリートがむきだしになっているなど危険な状態になっていた。昨年その部分を整備することができ、年齢毎の砂場での遊びがさらに充実した。

その結果、年齢に応じた砂場の遊びが展開している。砂への関わり方は、年齢によって変わる。それは、年齢に応じた興味の違いの表れである。年齢に応じた自分達の遊び方で十分に砂場遊びができるよう、使用する道具等にも工夫した保育を展開している。



3歳

砂の感触を味わっている。3歳児が好きなダンプカーやシャベルカーなどに砂を積む、シャベルで砂を掘るなど、一人ひとりが自分の興味のままに砂遊びをする。



4歳

砂を用いて、お料理を作ってままごとに発展していく。一人ひとりの遊びであった3歳児に対して、友達と一緒にやりとりを行いながら遊ぶことで、より複雑な展開が可能になる。



5歳

砂と水の関係を試しながら遊んでいる様子。溝を掘り、ヒューム管も使うことで、ダイナミックな遊びが展開する。4歳よりも、より多い人数の仲間で、話し合って遊びを作っていく。

以上のように年齢によって砂場での遊び方が変わってくることを考えると、砂場の空間を保障して、幼児の興味を存分に引き出せるような年齢に応じた砂場環境を用意する工夫が必要になる。

2. 作物の生成

1) 畑の活用

本園は、園庭の中に畑を作り、さまざまな野菜を育てている。その目的は、自分の手で植えた種(苗)が生長する過程を目の当たりにしながら世話をし、収穫する喜びを味わうことである。



また、自園に畑があることで、幼児にさまざまな気づきを促す環境を用意することができる。例えば、下の写真のように、苗の正体を知らせずに予想させて植え付け、実をつけるまでの生長過程の折々に幼児の発見を促すこともできる。



また、花と実と種の関係に興味を持った幼児の探究心を満たすために、花が咲いた大根をそのまま畑に置いておくことも可能になる。



スナップエンドウを栽培した経験から、花から実ができることがわかった幼児が、「大根の花から大根がなるのかな」と言ったので、幼児の探究心を大事にしたいと思い、しばらく大根をこのままにしておくことにした。

2) 収穫物を食す

幼児たちは当然のように、食べることを目的に畑にできた野菜を収穫する。

このとき、幼児が自らの手で採った野菜を自分の口に入れるまで、幼児の目の前で物事を進行させることが、大切であると考えている。因果関係的認識の発達途上にある幼児にとって、プロセスを自分で追いかけることができることが、「自分で採った野菜を食べる」という手応えにつながる。

このことを実現し、なおかつ保育の中で無理なく行える調理法は、主として「ゆでる」こと、「焼く」ことになる。スナップエンドウの筋をとって保育室でゆでたり、ピーマンを七輪で焼いたりした。



さらに、畑のそばにピザ窯を作り、畑で採った野菜をその場で調理できるようにした。自分の選んだ野菜をのせてピザを作り、ピザ窯で焼くことも行った。自分たちで育てた野菜であるためか、どうしても野菜が食べられなかった幼児が自分から野菜に手を伸ばし、自分なりのピザを味わう姿を見せてくれた。



こうした経験は、幼児の遊びの中にも再現遊びとして現れる。下の写真は、ピザ窯を積み木で作ってピザ焼きをしたり、ピザの宅配ごっこで遊んでいるところである。豊かな経験は、幼児の中に蓄積し、このように遊びの中で表現される。



3. 虫や水辺の環境

園庭除染による表土除去以来、園庭の草むらがなかなか育たない数年が続いていた。そのため、虫などが生育しにくく、生き物や草花の環境は劣悪であった。幼児が戸外遊びの中で、虫や草、木の実を捜してそれを採集することは、まさに人類の進化の過程における狩猟・採集の時代をたどっているようにみえる。幼児にとって身近な園庭において、虫や草花を発見し、それを自由に採集できる環境は不可欠である。



← 虫取り網を持って、チョウを追いかけてたり、草むらにいる小さい虫を見つけたたり。



↑ 園庭の柔らかいところを掘って、幼虫探し。

← 畑にキュウリを採りに来たら、偶然見つけて、うまく捕まえることができた。

豊かな自然環境のおかげで、いろいろな虫が集まるようになった。



また、水辺の生き物も、幼児の興味の対象になる。オタマジャクシ、メダカなどが泳ぐ様子をじっと見ている幼児、オタマジャクシを玉杓子ですくう幼児、ホテイアオイに興味を持つ幼児など、小さな池に生息する命に日常的に触れることができる。



池でつけたオタマジャクシやメダカなどは、保育室の水槽でしばらく観察したり、池に返したりしている。時々見つけるヤゴは、幼児にとって宝物になる。保育室で飼育され、ある朝当園してきたら、飼育箱の中に、ヤゴはいなくてトンボがいることに驚いたり喜んだりする。

以上のように、実際の虫や生き物に直接関わる体験や、それらを身近において変化の様子を観察する体験を通して、幼児には豊かな感情経験を保障



することができる。こうした直接体験による五感への刺激、それを通した感情経験こそが、幼児期に大切な教育内容でもある。そして、このような感情経験を土台として、考えたり、試したり、調べたりという学習に向かう力の基礎が養われると考えている。

4. 運動場の環境

園庭には、虫取りなどのために意図的に草むらを残したエリアに対して、幼児が力いっぱい走ったり、自転車などを乗り回す運動場のエリアもある。広い平らな運動場は、走るだけでなく、自転車などの乗り物を気持ちよく乗り回すことができる空間である。

幼児は自転車を乗り回すことが好きである。その姿からは、自分の足で走る以上の速さを体験できること、それによって風を切って走る心地よさを感じることに、自転車に乗れるという誇らしさなどを感じている様子が窺える。自転車は年長になってから使えるルールにしているが、幼児にとって自転車に乗って遊ぶことは、年長に進級した誇らしさの象徴でもある。進級した4月から、喜々として自転車を乗り回し、ほとんどの幼児が1学期中には自転車に乗れるようになっている。幼稚園の敷地内で自転車乗りの練習ができるのも本園の特徴である。



運動場を、ヘルメットをかぶって颯爽と自転車に乗る年長児。

5歳で自転車に乗れるまでにも、年少、年中と段階的に乗り物を設定している。年少児は足こぎ自動車や三輪車で少しずつ園庭の移動範囲を広げていく。年中児になるとストライダーを乗れるようになる。



足こぎ自動車(年少)



三輪車をこぐ年少(左側)

ストライダーをこぐ年中(右側)



ストライダーは、運動会の年中組障害走の中でも活用される。

おわりに

天気の良い日には、幼稚園の保育時間のほぼ8割を過ごす園庭である。戸外で遊ぶ楽しさを伝えるため、保育者は、子どもが自らいろいろな発見を行えるような工夫を行っている。砂と水との関わりは幼児の発達に不可欠であるが、さらに、自然の中で見つけた虫や生き物、畑の作物などは、保育者の意図を超えた発見を子どもに促してくれることもある。そのような場面に出会ったとき、自然がどれほど偉大な環境として子どもの成長に関わっているかを実感する。

平成29年度から、意図的に草むらを増やすようにしたり、ピザ窯を作ったりと園庭の環境を整えてきた。30年度は、「戸外活動における地域課題解消に向けた保育活動の実践及び情報・成果の発信」事業として、学長裁量経費を利用させていただき、さらに園庭の環境を整備することができ、充実した実践を行うことができた。(文責:白石)